



みなさんがフランスで映画と聞いて思い出すのは、世界三大映画祭のひとつ、カンヌ国際映画祭かもしれない。例年は5月に行われるカンヌ映画祭は、今年2021年は7月に開催され、昨年はコロナ禍で中止になったため2年ぶりの現地開催となった。日本映画では、村上春樹の短編小説を原作にした『ドライブ・マイ・カー』が長編コンペティション部門に参加し、監督の濱口竜介と共同脚本の大江崇允が脚本賞を受賞したことで日本でも話題になった。他にも、「ある視点」部門の開幕に上映されたのは旧帝国陸軍少尉だった小野田寛郎さんを取り上げた『ONODA 一万夜を越えて』だったし、アニメ監督細田守の『竜とそばかすの姫』も公式上映された。カンヌ映画祭についてはLinguaの昨年の号で永田先生が書かれているので、ぜひそちらも読んでください。

ところでみなさんは映画がどこで生まれたのか知っていますか？アメリカの発明王エジソンは、1890年にキネトスコープを発明し「映画の父」としても有名です。実はフランスにも、もうひとり（兄弟なのでもう二人の）「映画の父」がいるのです。それがリュミエール兄弟です。兄のオーギュストと弟のルイのリュミエール兄弟は世界最初の実写映画を作ったと言われ、工場の終業時間に出口から出てくる労働者

たちの姿を撮影しました。そもそも映画とは、パラパラマンガのように連続する写真をコマ送りして再生することで、文字通り動く画として映像を見せる技術です。リュミエール兄弟のシネマトグラフは品質と経済性の理由から一秒間に16コマというスピードで撮影をしました。これがのちにトーキーの時代になり映像に音声がつくと、一秒間に16コマという遅いスピードでは音声をつけてうまく再生することができず、一秒間に24コマのフレームレートで撮影／上映されるようになり、これが映画の世界で現在まで続く一つの基準になっています。ちなみに現在、日本のテレビのデジタル放送では高解像度の画像を一秒間に30コマ再生しています。こうして一秒間に16コマのフレームレートを特徴とするリュミエール兄弟の発明したシネマトグラフと呼ばれる撮影機は、現在の私たちが知る映画の原点に位置しているわけです。その後の映画の発展に与えた彼らの功績は大きく、フランス中部の都市リヨン出身の彼らの生家の一画は現在、リュミエール美術館やリュミエール研究所となり、貴重なフィルムや機材、映画作品や映画関係の資料がたくさん集められています。また、リュミエール美術館の向かい側には、「最初の」映画が撮られた工場の一部を保存して映画館になっています。世界で最初の映画が撮られた場所が映画館になっているなんて、なんだか映画の「生まれた」国フランスらしいと思いませんか。この映画館「プルミエ・フィルム」（「最初の映画作品」の意）では古今東西の名作がいつでも上映されていて、数年前にリヨンに友人を訪ねた際に私も立ち寄ったことがあります。その時には偶然日本の映画監督

小津安二郎の企画上映が行われていて、小津映画の『秋刀魚の味』をみました。

このリュミエール兄弟の映画館「プルミエ・フィルム」だけでなく、フランス各地には日本ではあまり見かけることのない少し変わった映画館があります。なかでも私の記憶に強く残っているのは、フランス西部の都市ナントにある映画館「ル・シネマトグラフ」です。ナントの旧市街にあるこの映画館の特徴はなんと言っても、元々カルメル修道会の礼拝所（チャペル）だった建物を使っている点です。歴史を紐解くと、元は17世紀に作られた礼拝所がフランス革命の時代に修道会が追放され牢獄として使われるなどした後、20世紀になって映画館として使われるようになったようです。この「ル・シネマトグラフ」も新作映画だけでなく、「プルミエ・フィルム」のように名作映画を安い料金で見られるようにしています。フランスでは日本に比べて安い料金(大体一作品 600 円前後)で映画を見られますが、現在は日本のように郊外型のシネコンが増えています。しかし街中には上記のようないわゆるアート系シアターもまだまだ頑張っています。私が留学していたル・マンの街には、中世の街並みそのまま残る旧市街に貴族の古い館を使った「シネポッシュ」がありました。このシネポッシュがのちに街の中心部に「レ・シネアスト」として新しくオープンします。留学中にはこの映画館でたくさんの映画を見ました。日本映画もたまたま上映されていて、是枝裕和監督の作品はどれも人気でした。

フランスで人気の日本映画は、ジブリアニメはもちろん小津や是枝のような家族をテーマにした作品です。最後におすすめの



ナントの映画館「ル・シネマトグラフ」



リュミエール兄弟の銅像

出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Yekaterinburg_Lumiere_brothers_monument.JPG

フランス映画について。フランソワ・オゾンやセドリック・クラピッシュの監督作品はどれもオススメです。他にも2006年のオムニバス映画『パリ、ジュテーム』もフランス映画の入門としてぜひ一度見てください。

エーリヒ・ケストナーは 映画でも面白い！

文学部 河合 まゆみ



ドイツ文学の映画化作品を授業で紹介することがありますが、そういう時、学生さんから文句なしに面白いと言ってもらえるのがケストナー作品の映画です。みなさんはエーリヒ・ケストナー (Erich Kästner 1899-1974) を知っていますか？世界的に有名な児童文学作家で、『エーミールと探偵たち』『飛ぶ教室』『ふたりのロッテ』などの傑作があります。実際に読んだことがなくても、名前くらい聞いたことがあるのではないのでしょうか。ケストナーの作品は度々映画化されており、どの原作小説も映画もほんとうに面白くておすすめなのですが、なかでもイチオシが『エーミールと探偵たち』です。